

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵「呉越絵」の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002364

國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の解題と翻刻

針本 正行
山本 岳史

はじめに

國學院大學図書館に「呉越絵」（國學院本）という物語絵巻が収蔵されている。^①「呉越絵」は、これまでに「呉越物語」として三点が確認されている。一つは、赤木文庫旧蔵本、二つは、ニューヨークパブリックライブラリーのスぺンサーコレクション所蔵本、さらに、天理大学附属天理図書館所蔵「はんれい」（本物語絵巻は「呉越物語」の下巻に相当する）である。詞書、挿絵ともにそろっている「呉越物語」の中で、赤木文庫本・スペンサー本・天理本はすでに翻刻がなされている。^②そこで本稿では、國學院大學図書館所蔵「呉越絵」の全文翻刻、赤木文庫本・天理本の本文との対校、國學院本の挿絵の構図と他本との相違、「呉越絵」の典拠、國學院本詞書の書写者の特定などの諸問題についての検証を通して、國學院本の特徴を明らかにしたい。なお、翻刻にあたっては山本岳史氏の協力を得た。

【書誌】

全三卷。料紙は鳥の子、下絵は金泥草花文様。紙高は凡そ三十三・二糎。上巻は長さ凡そ十三・〇米、挿絵は五図（内二図は二紙分の長大図）。中巻は長さ凡そ一二・九米、絵は七図。下巻は長さ凡そ十・〇米、絵は六図（内一図は二紙分の長大図）。

一、『呉越絵』の本文

國學院大學図書館所蔵『呉越絵』（略号「國」）の本文と赤木文庫旧蔵『呉越物語』（略号「赤」）のそれとの冒頭本文を対校すると次のようになる。

國 それ國をおさむる大しやうはふんふのりやうたう一つもかけ・はその國をたやかならすおさまる世にはふんをもつてしめし見たる、
 赤 それ國をおさむる大将・・は文武・の両・道・一つもかけては其・國をたやかならすおさまる世には文・をもつてしめし見たる、
 國 時は武をもつてこれをしつめ民をあはれみちうしんのいさめにしよくし五しやうをもつてもつはらとせんになどかは國
 赤 時は武をもつて是・をしつめ民をあはれみ忠臣・のいさめにしよくし五常・をもつてもつはらとせんになどかは國
 國 たみすなほならんやむかしいてうに呉越とてならへる二つの國ありこのりやうこくのしよこう、みなわうたうをおこなはず
 赤 民・すなほならんやむかし異朝・に呉越とてならへる二つの國ある此・りやうこくのしよこう、みな王道・をおこなはず
 國 はけうをつとめとしけるあひた呉國より越をうつてとらんとしゑつのかによりは呉をほろほしてあかせんと
 赤 はけうをつとめとしけるあひた呉國より越をうつてとらんとし越・の國・よりは呉をほろほしてあかせんと

このように、國學院本と赤木文庫本の本文とは漢字のあて字以外の異同はほとんどない。ただ、赤木文庫本には、下巻に脱落があるようである。それは、國學院本の中巻第六回直前の場面である「にはあらずた、せいしにかいらうのちきりをむすはんためなり生前に」とわかれてし、てのちさいくわいをこせはんせうの國をたもちてもなにかせんされはたとひ呉越のくわいめいやふれて一たひわれ呉のためにとりこになるともせいしをたこくへをくる事はあるへからすとそのたまひけるはんれいなみたをなかし申けるはまことにきみてん／＼のおもひをはかるにしんかなしまさるにあらずといへとももしいませいしをおしみたまは、呉越のいくさふた、ひやふれてこわうまたつはものをはつすへしさるほとならば越の國を呉にあはせらるゝのみにあらずせいしもるともにうはるへししやしよくもうは、れなんわれつら／＼事のていをはかるに呉王いんをこのみいろにまよふことはなはたしせいし呉の後宮に入給ふほとならば呉わうこれにまよひてまつりことをうしなはん事うたかふところにあらず國ついへたみそむかんときにをよんでつはものおこし呉をせめらるればかつことをたちどころにゑつべしこれしそんはんせいにおよんでふじんれんりの御ちきり久しかるへきみちとなるへしと一とはなけき一とはいさめてりをつくし申ければ越わうことはりにをれてせいしを呉國へそをくられけるこそまことにたくひなきわかれなり」である。³⁾この当該本文はニューヨークパブリックライブラリーのスペンサーコレクション所蔵本にもあるので、赤木文庫本と國學院本との本文系統の問題ではない。

次に、下巻における國學院大學図書館所蔵『呉越絵』(略号「國」)の本文と赤木文庫旧蔵『呉越物語』(略号「赤」)と天理大学附属天理図書館『はんれい』(略号「天」)のそれとの巻末場面の本文を対校する。

國 これより越王・・呉王・をとるのみならずしん楚せいしんを・・たいらけてはしやのめいわうとなり・・しかはそのこうを
 赤 これよりゑつわう呉國・をとるのみならず秦・楚齊・周・をうちしたかへてはしやの名王・・となり給ひしかはそのこうを
 天 これよりゑつわう呉こくをとるのみならずしんせいしんを・・たいらけてはしやのめいわうとなり・・しかはそのこうを

國 しゃうしてはんれいにをんをほうせんため・大くはんをあたへ大國・をゆつらんとたまふ・はんれいかつてそのくはんろくを
 赤 しゃうしてはんれいにをんをほうせんために大官・・をあたへ大こくをさつけんと給・ふに范・れいかつてそのくはんろくを
 天 しゃうしてはんれいにをんおほうせんため、大くわんをあたえ大こくをゆつらんとたまふ・はんれいかつてそのくわんろくを
 國 うけす大めいのしたにはひさしくおるへからすこうなり名とけて身しりそくはてんのみちなりとてつゐにせいめいをかへ
 赤 うけす大めいのしたには久・しくおるへからす功・なり名とけて身しりそくは天・の道・なりとてつゐにせいめいをかへ
 天 うけす大めいのしたにはひさしくおるへからすこうなり名とけて身しりそくはてんのみちなりとてつゐにせいめいをかへ
 國 陶朱公とうしゆこう・・とよはれて五湖こといふところに身をかくし世をのかれてそゐたりけるろくわのきしにつりをしてこうちんのほかにて
 赤 陶朱公・・とよはれて五湖といふ所・・に身をかくし世をのかれてそゐたりけるろくわのきしに釣・をしてこうちんのほかに・
 天 たうしゆこうとよはれて五こといふところに身をかくし世をのかれてそゐたりけるろくわのきしにつりをしてこうちんの外・に・
 國 あそんてつゐにはくとうのおきとなれりまことにみちにいたりたる人はたれもかやうにありたき事ともなりさてそれより越わう
 赤 あそんてつゐに白頭・・のおきとなれるまことに道・にいたりたる人は誰・もかやうにありたき事共・也・さてそれより越わう
 天 あそんてつゐにはくとうのおきとなれりまことに道・にいたりたる人はたれもかやうに有たき事ともなりされはそれよりゑつ王
 國 こうせんはせいしとちきりをむすひしゆんせうみしかきをくるしみあさまつりことも、たくくなれはいまくらゐにありても
 赤 こうせんはせいしとちきりをむすひ青宵・・みしかきをくるしみあさまつりことも、たくくなれは今・位・・にありても
 天 こうせんはせいしと契り・をむすひしゆんせうみしかきをくるしみあさまつりこともたへくなれはいまはくらゐにありても
 國 ゑきなしとて太子わうせきよに世をゆつりわか身はあらためてんをつくりいよくゑいくわにさかへ給・ひけり
 赤 益・なしとて太子わうせきよに代をゆつり我・身はあらため殿・をつくりいよく榮・花・にさかへたまひける
 天 ゑきなしとて太子わうせきよに世をゆつりわか身はあらためてんをつくりいよくゑいくわにさかへたまひけり

國

赤 是そ呉越の記を、あらはしけるとかや

天

このように、國學院本と赤木文庫本・天理本の本文とは漢字のあて字以外の異同はほとんどない。ただ、赤木文庫本は、「是そ呉越の記を、あらはしけるとかや」と、いわゆる語り納めの常套句をもつて物語を閉じている。

二、『呉越絵』の挿絵の構図

國學院大學所蔵『呉越絵』には、上巻に五図、中巻に七図、下巻に六図の挿絵がある。天理大学附属天理図書館所蔵『はんれい』に『呉越』下巻に相当するものが七図ある。天理大学附属天理図書館所蔵『呉越』の挿絵については、石川透氏のご論⁴⁾を参照した。

(一) 上巻の挿絵の構図

第一図は、二紙分の長大図で、呉国の宮殿にて、越王勾踐が臣下と謁見している場面。廊下には、臣下が居並び、庭には池が右中央にあり、門の所に范蠡が馬から下りている様子が描かれている。第二図は、呉王夫差が甲冑で武装した臣下と謁見している場面。廊下に三人の兵士、庭にも三人の兵士が描かれている。第三図は、二紙分の長大図で、水辺にて、呉王軍と越王軍とが合戦している場面。右が越の軍勢、左が呉の軍勢。両軍とも同じ形の旗を持つ。第四図は、大夫種が越王勾踐を諫めている場面。左画面に越王勾踐、中央に太子、左画面に兵士五名が描かれている。第五図は、呉国の宮殿にて、呉王夫差に大夫種が言上している場面。中央左に呉王夫差が椅子

に座り、中央に大夫種と臣下一人、廊下に五人の臣下が描かれている。

(二) 中巻の挿絵の構図

第一図は、呉国の宮殿にて、呉王夫差に大宰が拝謁している場面。左画面に格上の臣下、右画面に、格下の臣下と越王勾践が控えている様子が描かれている。第二図は、呉国で越王勾践が牢屋に入れられている場面。左画面の牢屋の中に越王勾践、中央に魚売りに身をやつした范蠡が、手前右画面に番人三人が描かれている。第三図は、呉王夫差の寢所で呉王夫差を越王勾践が見舞う場面。右画面奥で病に臥せる呉王夫差、その傍らには越王勾践が、左画面下には臣下五名が描かれている。第四図は、越王勾践が越国に帰る場面。中央に車に乗った越王勾践、その周りに従者十数名、左画面に、水辺より蛙十数匹が描かれている。第五図は、越国の宮殿で、越王勾践の帰還を祝う宴席の場面。中央左に椅子に座る越王勾践、その前で臣下の者たちが酒を飲み談笑をしている。第六図は、越国の宮殿で、越王勾践が後の西施と対面している場面。中央右に越王勾践が椅子に座り、その隣に西施も椅子に座っている。西施の前に侍女一人、右画面の廊下に五人の臣下、左に祝いの膳を運ぶ侍女が描かれている。第七図は、呉国の宮殿にて、呉王夫差と西施とが対面している場面。左画面奥に呉王夫差が、その隣に西施が椅子に座っている。二人の侍女が座り膳を供し、祝意を表する侍女三人が立っている。

(三) 下巻の挿絵の構図

第一図は、范蠡が太刀を調達する場面。右画面に范蠡が、左画面に男と妻と娘とが描かれている。天理本では、范蠡が傘をかぶり身をやつしている図となっている。第二図は、呉国の宮殿にて、呉王夫差が捕縛した男を尋問している場面。呉王夫差は椅子に座り、廊下に六人の臣下が、庭に捕縛された男と捕縛した三人の従者が描かれている。天理本では臣下は皆呉王夫差に顔を向けているが、國學院本は臣下三人が捕縛者を見ている。第三図は、越国の軍勢が

呉国に攻め入る場面。画面上に川が、越王軍が騎馬六人などが描かれている。天理本では左から軍勢が攻め込む図となっている。この後に天理本には呉王が臣下者と合議している図がある。第四図は、越王軍と呉王軍とが合戦している場面。右が越王軍、左が呉王軍。天理本では左右の軍勢が逆か。第五図は、夫差が国に逃げ帰った場面。門には伍子胥の首がかけられている。夫差は袖で顔を隠すようにしている。天理本では、伍子胥の首が庭にある。第六図は、越王勾践が玉座に座った場面。天理本も同じ。

三、『呉越絵』の典拠 — 忠臣伍子胥譚を中心として —

『呉越絵』の典拠について、次の忠臣伍子胥譚の条を対象として確認しておく。

呉わうすてにめんはくせられてごわう東門をすき給ふときしんごししよかいさめによつてくひをはねらるゝ時はたほこのうへにかけたりし一双のまなこ三年までかれすしてありけるかそのまなしりあきらかにひらけてあひ見てわらへるけしきなりければ呉王これにおもてをあはする事をさすかはつかしくやおもはれけん袖をかほにをしあてゝかうへをうなたれてすきたまふ

右の忠臣伍子胥譚の典拠として、『太平記』巻第四「呉越軍事」、『曾我物語』巻五「呉越のたたかひの事」があげられる。

呉王已ニ被_レ面縛_一、呉ノ東門ヲ過給フニ、忠臣伍子胥ガ諫ニ依テ、被_レ刎_レ首時、幢ノ上ニ掛タリシ一双ノ眼、三年マデ未_レ枯シテ有ケルガ、其眸明ニ開ケ、相見テ笑ヘル氣色ナリケレバ、呉王是ニ面ヲ見事サスガ恥カシクヤ被_レ思ケン、袖ヲ顔ニ押當テ低_レ首過給フ。

(旧日本古典文学大系『太平記』二 一五四〜五頁)

呉王は既に面縛せられて、呉の東門を通給ひけるに、呉王の忠臣伍子胥呉子胥か諫あたはすしニて首を刎られし時の両眼、幢に懸たりしか、呉王のはてを見んとて、三年までかれず、見ひらきてありしか、呉王面縛せられ、彼一双の眼の前をわたされけるを見て、みつから動齎て、大に笑氣色見えけり、執情の程そおそろしき、呉王、彼に面を合ぬ事さすかはつかしくや思ひけん、そてを顔にをしあて、首傾てとをり給そいたはしき。

(伝承文学資料集第四輯二一〇～一頁 昭和四六年九月)

『呉越絵』が、『太平記』・『曾我物語』を直接の典拠としているというのではない。新作の物語絵である『呉越絵』の制作者が「忠臣伍子胥譚」を『呉越絵』の生成過程において取り入れたものと思量されるのである。

四、『呉越絵』詞書の書写者・挿絵の絵師たち

『呉越絵』と同時代に制作されたとされる絵入り物語が國學院大學図書館に複数収蔵されている。『舟のゐとく』⁵⁾・『長良』である。これら三作品は室町物語の一つと目されているが、江戸時代前期(寛文・延宝期)に制作された新作の物語絵巻かと推定され、詞書書写者も同一と思われる。参考図に示したように、物語冒頭の書き出しの詞書の「それ」をはじめとして、「國」・「人」・「乃」・「代」・「あ」の崩し方が同一であり、料紙、下絵も同一である。『呉越絵』と『舟のゐとく』・『張良』は寛文・延宝期に同一の詞書書写者によって制作された作品といえるであろう。なお、國學院大學図書館に所蔵されている『竹取物語絵巻』の中で、武田祐吉博士旧蔵本とハイド旧蔵本の詞書書写者が『呉越絵』・『舟のゐとく』・『張良』と同一であるとの石川透氏の説がある⁶⁾。石川氏は、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』、CBL所蔵『倭藤太物語』・『舞の本絵巻』、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語絵巻』、さらに國學

院大學図書館所蔵「張良」も詞書書写者が同じであるともされている⁽⁷⁾。

また、「呉越絵」が納められている箱の内側に「呉越ものがたり 傳 狩野長信筆」とある。伝承絵師の狩野長信は、江戸時代初期の狩野派の絵師として、寛永期に活躍したようであるので、「呉越絵」挿絵の絵師とすると、やや時期が早く、「呉越絵」の生成過程に関与したとは言い難い。しかし、参考図として掲げたように、「舟のゐとく」上巻第二図（貨狄と揚基が皇帝に拝謁する場面）・第三図（蚩尤軍が貨狄・揚基軍と合戦する場面）と、「呉越絵」上巻第二図（呉王夫差が臣下と謁見している場面）・第三図（呉王軍と越王軍とが合戦している場面）は、それぞれの絵巻の挿絵を交換しても問題にならない程に酷似した構図及び人物の造型方法とが同一であると思量されるものである。寛文・延宝期に「呉越絵」・「舟のゐとく」・「張良」の絵巻物語を新作として制作していた絵双紙屋の存在が仮定されるのである。

注

- (1) 徳江元正氏によって、國學院大學所蔵「呉越絵」の本文の特徴、概要が明らかにされている「秤の本地」他解題 國學院大學図書館善本解題Ⅱ（「國學院大學図書館紀要」二二 一九九〇年三月）。
- (2) 赤木文庫旧蔵「呉越物語」（二冊）の翻刻は「室町時代物語大成」四（角川書店 昭和五十一年）で、スペンサー本「呉越物語」（大型絵巻五卷）の翻刻は楊曉捷氏によって、「ニューヨーク公立図書館スペインサーコレクション」『呉越物語』絵巻―解説と翻刻―（「特定研究年報 一九九五年版」国文学研究資料館 一九七七年二月）で、天理本の翻刻は石川透氏によって「天理大学附属天理図書館蔵『はんれい』について―附解題・翻刻・挿絵―」（徳江元正退職記念鎌倉室町文學論纂）三 弥井書店 平成十四年）でなされている。
- (3) すでに徳江元正氏によりご指摘のあるところである（前掲注（1））。
- (4) 石川透氏前掲注（2）。

(5) 國學院大學図書館所蔵「舟のゐとく」の翻刻は針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』と翻刻・解題」(「國學院大學 校史・学術資産研究」二 國學院大學研究開発推進機構 校史・学術資産研究センター 平成二十二年三月)がある。また、天理大学附属天理図書館にも「舟のゐとく」が所蔵され、翻刻は『室町時代物語大成』11(角川書店 昭和五十八年)に、典拠、生成過程についての論としては、濱中修氏の「『舟のゐとく』の形成」(『室町物語論攷』三〇〇〜三二五頁 新典社 一九九六年)がある。

(6) 石川透氏「國學院大學図書館所蔵の奈良絵本・絵巻」(針本正行編『物語絵の世界』二〇一〇年)。國學院大學図書館所蔵「竹取物語絵巻」の中で武田祐吉博士旧蔵本の翻刻・解題は、針本正行「竹取物語絵巻の本文」(「國學院大學大学院紀要―文学研究科―」三八 二〇〇七年三月)で、ハイド旧蔵本・小型本の翻刻・解題は、二〇〇七〜二〇〇九年度科学研究費基盤研究B報告書「物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究―國學院大學所蔵本を中心として」(代表者針本正行)で報告した。

(7) 石川透氏「第四編 太平記絵巻奈良絵本・絵巻類 第三章 太平記絵巻・絵本の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』三 弥井書店 二〇〇三年)。

國學院大學図書館蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、古山課長はじめ館員の方々に多大なご配慮をいただいた。ここに御礼申し上げます。



『舟のゐとく』上巻第2図



『呉越絵』上巻第2図



『呉越絵』上巻第3図



『舟のゐとく』上巻第3図

呉越絵 翻刻

上

それ國をおさむる大しやうはぶんふのりやう
 たう一つもかけばその國おだやかならす
 おさまる代にはぶんをもつてしめしみた
 る、時は武をもつてこれをしつめ民を
 あはれみちうしんのいさめにしよくし五
 しやうをもつてもつはらとせんになとか國
 たみすなほならんやむかしいてうに呉
 越とてならへる二つの國ありこのりやう
 こくのしよこうみなわうたうをおこな
 はすはけうをつとめとしけるあひた
 呉國より越をうつてとらんとしゑつの
 くによりは呉をほろほしてあはせんと
 するかくのことくあらそふ事年ひさし

呉越共に代かはりけるか周のすゑの代
 にあたつて呉國の王をは呉王夫差と
 いひ越の國のあるしをは越王勾踐とそ申
 けるあるとき越王はんれいといふしんか
 をめしてのたまひけるは呉王はこれふそ
 のかたきなりわれこれをうたすしてい
 たつらに年月をおくる事天下の人
 のあさけりをうくるのみにあらずかねて
 は父祖のかはねをきうせんのこけのした
 にはつかしむうらみありしかればわれ今
 國のつはものをあつめてみつから呉國へ
 うちこえ呉王ふさをほろほして父
 祖のうらみをさんせんとおもふなりなん
 ちはしはらくこの國に

と、まり

しやしよくを

まもるへしと

のた

まひ

けれ

は

(第一回)

はんれいいさめ申けるはわれひそかに事
 のしさいをはかりみるに今ゑつのちからを
 もつて呉をほろほさん事はかたかるへし
 そのゆへはまつ兩國のつはものをかそふる
 に呉のつはものは二十万騎越はわつか
 に十萬騎なりまことに小をもつて大
 にてきせずこれ呉をほろほしかたき
 そのひとつなり次にときをもつては
 かるに春夏はやうのときにてちうをお
 こなひ秋冬はいんの時にてけいはつ
 をもつはらにすときいま春のはしめ
 なりこれせいはつをいたすへきときに

あらすこれ呉をほろほしかたきそ

のふたつなりつきにけんしんのきする
 ところはその國つよしわれつたへうけ
 たまはる呉王ふさのしんかにごししよ
 といふものありちゑふかふして人をな
 つけもんはかりとをして主をいさむ
 かれ呉國にあらんほとは呉をほろほし
 かたかるへしこれその三なりきりんは
 角つのにくありてたけきかたちをあら
 はすせんりうは三冬とつにちつして一やうら
 いふくのてんをまつ君呉越をあはせられ
 中國にのそんでなんめんにしてこせうせ
 むとおほしめさはしはらくつはものをふせ
 ふをかくし時をまち給ふへしと申ければ
 そのとき越王おほきにいかつてのたまひ
 けるは礼記らいきにいはいくちゝのあたをほうせん
 にはともに天をいたゝかすといへりわれす
 てにさうねんにおよふまで呉をほろほ

さすともに日月のひかりをいたゝく事
 人のはつかしむるところにあらすやこれ
 をもつてつはものをあつむるところに
 なん三不可^{ふか}をあけてわれをとゝむる
 事そのひとつみちにかなはずまつせいの
 多小をかそへてたゝかひをいたさはゑつ
 のせいは呉のつはものにたいしかたし
 しかれともいくさのせうぶかならずしも
 せい^のたせうによらすたゝときのうんに
 よりまさに大しやうのはかりことによるさ
 れは呉と越とたゝかふ事たひくにおよ
 ぶかちまけたかひにかはれるこれなんちか
 みなしるところなり今更になんそ越
 の小せいをもつて呉の大できにたゝかふ
 事かなふましとわれをいさむるそやなん
 ちかふりやくのたらさるところの其ひ
 とつなりつきにときをもつて軍のせう
 ふをはからは天下の人みなときをしれ

りたれかいくさにかたさらんもしはる
 なつはやうのときにてばつをおこな
 はすといはゝいんのたうわうの桀^{けつ}を
 うちしも春なりしうのふわうの紂^{ちゆう}
 をうちしも春なりされはてんの時
 はちのりにしかすちのりは人の和に
 しかすといへりしかるになんちいませいば
 つををこなふへきときにあらすとわれ
 をいさむるこれなんちかちりよのあ
 さきところのふたつなりつきに呉國
 に伍子胥^{ごしよ}かあらんほとは呉をほろほ
 す事かなふましといはゝ我つるに
 父祖のかたきをうたむ事あるへからす
 たゝいたつらにごししよかしなん事
 をまたはごししよと我といつれかさきた
 ちいつれかのこらん此ことはりをわきまへ
 すしてわれせいはつをやむへきやこれ
 なんちかくちの三つなりそもく我

日かすへてつはものをあつむる事

呉國へもさためてきこえぬへしことゆ

たんせはかへつて呉わうにさかよせ

にせられはくやむともゑきあるまし

しはらくもやむましとて國中を

ふれてつはものをめされけるに其

勢十萬よきとそしるしける越王

十一年二月上旬にこうせんみつから

十萬よきのつはものを

そつして呉國へ

そよせられ

ける

(第二回)

呉王ふさこれをきゝてせうてきを

あさむくへからすとてみつから二十万

きのせいをそつして呉と越との

さかひふせうけんといふところにちん

をとつてまちたまふかのふせうけん

と申はうしろにはくわいけいさんといふ

大さんありまへには大河をへたてゝ

大せいむかふわさとてきをうたむかため

に三万よきをいたして十七万きをは

ちんのうしろの山かけにふかくかくして

そをきたりけるさるほとに越王は

十萬きのせいにてかのふせうけん

うちのそんて呉國のつはものをみた

まへは其勢わつかに二三まんきには

すきしとおほえてところくひかへ

たり越王これを御らんしておもふに

もにぬ小勢なりけりと見あなとり

ければ十萬よきのつはものをしたかへ

やかて川みつにうちいれさせてむま

いかたをくんでうちわたす比は二月上

しゆんの事なれはのこるさむさもま

たはけしくて川水こほりにつらな

りつはものともみな手こゝへて弓を

ひく事もかなはずむまはひつめを

ゆきになつむてかけひきもおもふ

まゝならすされとも越王みつからせめ

つゝみうつてすゝまれければ越のつは

ものわれさきにとくつはみをならへて

かけいる呉國のつはものこれをみて

もとよりたくみし事なれはかたき

をなんしよへおひきいれとりこめて

うたんといかりし事なれは三まんよき

のつはものともかけあはするやうにし

て一いくさもせてすてふちをうつて

ふせうけんのちんをひきしりそきて

くわいけいさんへ引こもり十七まんきの

勢と一しよになる越のつはものかつ

にのつてきたなしかへせとよはゝりか

けてにくるをおふ事三十里たいのちん

を一ちんにあはせたゝさうをもちかへ

りみすむまのきるゝほとこそおふた

りけれ日すてにせいさんにかゝらせた

まふと見えしところに呉のつはもの廿

万きおもふまゝにてきをなんしよへをひ

きいれて四方の山よりうつて出越王

こうせんを中にとりこめ一人ももらさし

とせめたゝかふ越のつはものけさの軍

にとをかけして人馬ともにつかれた

るうへ勢はすくなし呉の大勢にかこ

まれたゝ一しよに馬をよせてひかへば

うせんとしてゐたりしかてきしき

りにうつてかゝれはすゝむてまへなる

かたきにかゝらんとすれはてきはけんそな

るやまにさゝへてやしりをそろへてま

ちかけたりひきかへしてうしろなるて

きをはらはんとすれはかたきは大勢にて

ゑつのつはものつかれたりしんたいこゝ

にきはまつてほろふへきときいたれり
 されとも越王こうせんはかたきをやふり
 ときをくたく事こううかいきほひ
 をもあさむきはんくわいちやうりやう
 かいさみにみすきたりければ大勢の
 中へかけいりくもて十もんしにかけや
 ふりともゑにおひめくらし一しよにあふ
 て三しよわかれ四はうをはらつて八め
 むにあたりしはしかほとにへんくはして
 もゝたひたゝかふといへとも越王つる
 にうちまけて十まんよきのつはもの
 七まんよきうたれにけりこうせんこらへ
 かねてのこる三まんきをさうにした
 かへ一はうをうちやふりてくわいけい
 さんにうちのほりゑつのつはものを
 あつめ給ふにたまゝのこるものとて
 もなかは手をおふて

ことくく矢はきて

ほこさき

うちおれ

たり

(第三回)

越王いまはたのむかたなくてまし
 ますとおりふしせうふをうかゞふてい
 またいつかたへもつかさりつるりん國のつ
 はものおほく呉王のかたにはせくはゝ
 りければ呉王のつはものいよくかさ
 なつて三万きにてくわいけいさんの
 四めんをかこむ事たうまちくい
 ことくゑつわうまくのうちにいりつは
 ものともむかひてのたまひけるは
 われうんめいすてにけふにつきていま
 このなんにあへりこれまつたくたゝか
 ひのとかにあらすてんわれをほろほ

せり夜あけなはわれつはものと共に
 かたきのかこみをいて、呉王のちんに
 かけ入かはねをくんもんにさらしうらみ
 をさいしやうにほうすへきとて越のさ
 いほうをつむてことくくやきすて
 むとし給ふまた王^{わうせきよ}颯與とてことし八
 さいになり給ふさいあひの太子越
 王にしたかつて同しくこのちに
 おはしましけるをよひ出したてまつ
 りてなんちいまたようちなれはわがし
 にをくれててきにとられうきなを
 みん事も心うかるへしもし又われ
 てきにとらはれてわれなんちより
 さきたゝはしやうせんのおもひしのひ
 かたしたゝなんちをさきたてゝこゝろ
 やすくおもひきりあすのいくさに
 うちしにしてきうせんこけのした
 さんづのつゆのそこまでもおやこの

をんあいをすてしとおもふなりとてひ
 たりの袖になみたをぬくひ右の手に
 つるきをもち太子のしかいをすゝめ
 たまふときに越のさしやうくん大夫^{たいふ}
 種^{しゆ}といふしんかあり糸つわうの御まへ
 にすゝみ出て申けるは生をまつた
 くしていのちをまつ事とをくして
 かたく死をかるくしてせつにしたか
 ふ事ちかくしてやすしきみしはらく
 越のさいほうをやきすてたいしを
 ころすことをやめたまへしんふひ
 むなりといへとも呉わうをあさむひ
 て君王のしをすくひ本國にかへりて
 ふたゝひ大ぐんをこしこのはちをすゝかん
 とおもふいまこの山をかこんて一ちん
 をはらしむる呉の上しやうくん^{たいさい}太宰
 駱^ひはしんかいにしへのほうゆうならひ
 さしてかれかこゝろをさつせしにこれ

まことにけつきのゆうしやなりといへ
 ともあくまでそのこゝろによく有
 てのちのわさはひをかへりみす又
 かの呉わうふさのきやうきをかたる
 をきゝしかちゑあさくしてはかり
 ことみしかくいろこのみにしてみち
 にくらしくんしんともにいつれもあ
 さむくにやすきところなりそもく
 いま越のたゝかひりなく呉のかたきに
 かこまれぬる事もきみはんれいかい
 さめをもちひたまはさりしゆへにあら
 すやねかはくはそれかしにしはらく
 のはかりことをゆるされはいくんす
 まんの死をすくひふたゝひまたつは
 ものをおこしてくわいけいのはちを
 きよめたまへかしといさめ申ければ
 越王ことほりにおれてはいくんの大
 しやうはふたゝひはからすといへりいま

よりのちの事は大ふせうにまかす
 へしと

のたまひて

さいほうを

やかるゝ

事をやめ

太子の

しかいをも

やめら

れ

ける

(第四回)

大ふせうすなはち君のめいをうけて
 よろこひをなしはたをまひてくわい
 けいさんよりはせくたり大をんしやう
 にて越王はいきほひつきて呉のくん

もんにくたるとよは、りければ呉の兵
 三十万きかちときをつくりてみなは
 むせいをとなふ大ふせうはすなはち呉
 のゑんもんにいりて君王のしん越の
 こうせんのみうちの小臣大ふせうつ、
 しんて呉の上しやうくんの下執事に
 しよくすといふて大さいひかまへにかう
 へをたれひさまつきていたり大さいひ
 ゆかのうへに居なからいはいくをたかくあ
 けさせて大ふせうにあひてよろこひ
 ける大夫種あへていにしへのこのこ
 とはをいたさすつ、しんておもてをた
 れなみたをなかし申けるは寡君^{くわん}せん
 うんめいきはまりていきほひつき呉
 のつはものにかこまれぬるによつてい
 ましん大ふせうをもつて越王なか
 く呉のしんかとなり一畝のたみとならん
 ことをこふねかはくはこのころのつみ

ゆるされけふの死をたすけ給へしやう
 くんもし勾踐の死をすくひたまは、
 越の國を呉王にたてまつり成^な二
 湯沐^{たうぼく}地^{のちど}一さいほうをしやうくんにまいら
 せひしんせいしを呉王のみやつかへに
 そなへ申へしもしこのしよまうひ
 とつもかなひはんへらすつるに勾
 踐をころさんとならゑつのさいほ
 うことくくやきすてしそつの心を
 ひとつにして呉わうのちんにかけ入
 くんもんにかはねをと、むへしん
 へいせいしやうくとましはりをむす
 ふ事きやうしつよりもふかししやう
 せんのはうをんた、この事にあり
 しやうくんはやくこの事呉王にそう
 もんしてみつから胸中^{けうちゆう}のぜひをそん
 めいのうちにしらしめ給へと一とはいか
 り一とはなけきことはをつくして

申ければそのとき大きいひかんしよ
くまことにとけてこともつてかた
からすわれかならず越王のつみをは
申なたむへしこゝろやすくまちた
まへといひてやかて

呉わうのちんへそ

まいりける

(第五回)

大きいひすなはち呉王のきよくぎ
にちかつきことのしさいを有のまゝ
にそうしければ呉王大にいかつてそ
もく呉と越と國をあらそひつはも
のをあくる事けふのみにあらず
しかるにとうせんうんめいきはまり
て呉のとりことなれりこれ天の
我に越をあたへたまふ所にあらずや

なんちこれをしりなからこうせんかい
のちをたすけんとこふあへてちう
れつのしんかにあらずと大きにはら
をたてゝのたまひければ大きいひか
さねて申けるはわれふせうなりとい
へともいやしくもしやうくんのくらゐ
をゆるされゑつのつはものとたゝか
ひをいたす日はかりことをめくらし
大てきをやふりめいをかろくして
かつことをたちどころにこゝろよくせり
これひとへにそれかしかたんしんの
こうといふへし君のためにてんかの
たいへいをはからんに一日もちうを
つくしこゝろをかたふけさらんやつら
くこのせひをはかるに越王たゝか
ひにまけていきほひつきぬといへとも
なをのこる所のつはもの三まんよき
みなていひやうてつきのゆうしなり

呉のつはものおほしといへともきの

ふの軍にこうあつていまよりの

ちは身をまつたふしてしやうをむさほ

らんことをおもふへしゑつのつはものは

小勢なりといへともこゝろさしをひと

つにしてしかものかれぬところをしれ

り窮鼠きうそかへつてねこをかみ闘雀人とうしやくを

おそれすといへり呉越かさねてたゝか

はゝ呉はかならずあやうきにちかゝ

るへしまつ越王のいのちをたすけ

一吠のちをあたへて呉の下臣となさん

にはしかししからはくんわう呉越の両

國をあはするのみにあらずせいそしん

てうもことくくてうせずといふ事

あるへからすこれねをふかくしてほ

そをかたくするみちなりとことほり

をつくして申ければ呉王すなはちよ

くにふけるこゝろをたくましくして

さらはやくわいけいさんのかこみをと

きてこうせんをたすくへし

とそのたまひける

中

大きいひかへつて大夫種にこのよし

をかたりければ大夫種大きによるこひ

てくわいさんにはしりかへり越王にこの

よしを申せはしそつみないろをなをして

はんしをいてゝ一生にあふこれひとへに

大夫種かちほうにかゝれりとよろこはぬ

人はなかりけり越王すてにはたをまい

てかうさんせられはくわいけいのかこみを

といて呉のつはものは呉にかへり越のつ

はものは越にかへるこうせんすなはちた

いしわうせきよをは大ふせうにつけてほ

むこくへかへしつかはしわか身は白馬素はくばそ

車につて越の璽^{しじょう}綬をくひにかけ

てみつから呉の下臣とせうして呉

のぐんもんにくたり給ふかゝりけれと

も呉わうなをこゝろゆるしやなかり

けんくんしけいしんにちかつかすと

てこうせんにおもてをみえたまはすあ

まつさへこうせんをてんこくのくはんに

くたされて一日にゆく事わつかに一驛^{えき}

二驅^くにして呉のこそしやうへいり給ふ

そのありさま見る人なみたかゝらぬ

そてはなし

(第一回)

日をへてこそしやうにつき給へはす

なはちてかせあしかせをいれてつちの

ろうにそいれたてまつりける夜あ

け日くれぬれとも月日のひかりをも

みたまはねは一生めいあんの中にむか

つて年月のうつりかはるをもしり給

はねはなみたのうかむゆかのうへさこそは

露もふかゝりけめさるほとにはんれい

は越の國にとゝまりたりしかこの事

をきくよりうらみこつすいとをりて

しのひかたしあはれいかなる事をもし

て越王の命をたすけ奉り二たひ

ほんこくにかへしもろ共にはかり事を

めくらしにくわいけいさんのはちをき

よめんとあけくれはいかんをくたきてお

もひければ身をやつしかたちをかへあじ

かにうをゝいれてみつからこれをになひ

うをゝうるあきんとのまねをして呉

國へそゆきたりけるこそじやうのほ

とりにやすらひてこうせんのおはする

ところをとひければある人くはしく

をしへしらせけりはんれいうれしくお

もひてかのこくのあたりにゆきたりけ
れともきんもんけいごひまもなかりけ

れは一行の書を魚のはらのうちにお

さめてこく屋へなけいれてはんれいはかへ

りけるこうせんあやしくおほしめして

魚うをのはらをあけてみたまへは

西伯せいはいく囚とらはれし 姜里じやうりに 重耳てうじ走はしる 翟てきに

皆みなもつて以為なり 王霸わうは 莫なかれ 死しをゆるす事 許てきに 敵てきに

とそかきたりける筆のせいふんしやう

のていまかふへくもなきはんれいかわさ

なりとみたまひければかれいまたうき世

になからへてわかためにはいかんをつくし

けるとそのこゝろさしのほともあはれに

もまたたのしくもおはしめされけ

るにこそ一日へんしもいけるをうし

とかこたれしわか身なからの命もかへつ

ておしくはおもはれけれ

(第二回)

かゝりける所に呉わうふさにはかに

せきりんといふやまひをうけてしん

しんとこしなへになうらんしはふりて

かんなきいのれともしるしなしか醫師し

治ちすれともいへすへんしやくかつたへ針

治のじゆつもなをかいなしすてに

御いのちもあやうく見えさせ給ひ

けるところにある人そうもん申ける

はしんの國にこそめいるの有よし

うけたまはるいそきちよくちやうを

くたされてかれをめしてれうちの

てたてをもゑいふんあれかしと申

ければ呉王さらはかれをめさるへしと

てやかてせんしをくたされてかの

るしをそめされける名醫ちよく

ちやうにしたかつて呉わうのてん

に来る呉王いそぎ大くはんをあたへて御まへちかくめしてれうちのしゆつをとほせたまへはいし申けるはまことに御やまひおもしろいとくすしのしゆつのおよふましきにあらすせきりんのあちはひをなめて五味のやうをしらする人あらはたやすくれうぢしたてまつるへしとそ申けるさらはたれかこのせきりんをなめてそのあちはひをしらすへきととふに左右の近臣あひかへりみてこれをなむる人さらになしかゝりけるところにこうせんはるかに是をつたへきゝなみたをゝさへてのたまはくわれくわいけいのかこみにあひしときすてにはつせらるへかりしをいまにいのちをたすけをかれててんかのしやをまつことひとへにくんわう

しひなるめくみのかうをんなりいまこれをなめてそのをんをほうせすんはいつれの日をかこせんとてこく屋のくはんにのたまへはくはん人このむねあるくきやうにそうもん申ければくきやう呉王にはしらせたてまつらてひそかにせきりんをとつてこくやへつかはし給へは越わうこれをなめてそのあちはひを醫師にしらせらるゝいしあちはひをきいてれうちをくはへければ呉わうのやまひたちまちへいゆうしてけり呉わう大きによるこひ給ひかのいしにはしんの國のつかさをくたされあまつさへ大くはんをあたへたまひてしんの國へおくらせ給ふ

でんちうの

御よろこひ

きんしん

ちよくはん

いたるまで

そのよそほひ

おひ

たゝし

(第三回)

さて呉王は越わうのふるまひをき
 こしめし人こゝろあつてわれをた
 すくわれなんそこれをしやして其
 をんをほうするこゝろなからんやとて
 やかて越王をろうよりいたしたて
 まつるのみにあらずあまつさへ越の
 國をかへしあたへて本國にかへさるへし
 とそせんけせられけるこゝに呉王の
 しんかごししよと申ものごわうをい

さめて申けるはてんのあたふるをと
 らされはかへつてそのとかをうくとい
 へりこのとき越の國をとらすこ
 うせんをかへしつかはされん事はせん
 りの野へに虎をはなつかことし
 わさはひちかきにあるへしと申け
 れとも呉わうこれをきゝ給はすつ
 めにこうせんをほんこくへそかへされ
 ける越なのめならすにおほしめし
 はんりをとふ心ちして御くるまにめし
 て越の國へかへらせたまふところに
 みちのはたよりかはつそのかすおほ
 く車のまへにとひ来るこうせん是
 をみたまひてこれはゆうしをえてふ
 たゝひそくわいをたつすへきそのす
 いさうをてんよりちんにしめし給ふ
 ところそとてくるまよりおりてこ
 れをはいし

給ふ

(第四回)

かくて越の國にかへり給ふかおりふし
 さえかへる比なれはくわいけいさん
 をすきたまへは雪いとしろふふれ
 りけるを御らんしてやかてとりて
 御くちにふくみせきりんをなめた
 るけかれをきよめ給ふいまの世ま
 てもくわいけいのちしよくをすぐ
 とはこれなるへしさて本國にかへ
 りてすみこし古宮をみたまへは
 いつしか三とせにあればてふく
 ろうせうけいのゑたになききつ
 ねらんきくの草むらにかくるはらふ人
 なくかんていにらくえうみちてせう
 くたり越王死をまぬかれてか

へりたまひぬときこえしかははん
 れいならひわうせきよを宮中にいれ
 たてまつりぬこゝに越王のきさきせいし
 といふひしんおはしけりようしよく世
 にすくれせんけんたくひなかりしかは
 越わうことにてうあひはなはたしくて
 しはらくもそはをはなれたまはす越
 王呉國にとらはれさせたまひしほとは
 そのなんをのかれんかために身をそ
 はめてかくれるたまひたりしか越わう
 かへり給ふよしをきゝ給ひてすなはちこう
 きうにかへりまいりたまふとしの三年
 をまちわひてたえぬおもひにしつみ
 たまひけるなけきのほともあらはれ
 てひんをろそかはたへきえたる御かた
 ちいとわりなくらうたけて梨花りくわ一
 枝し春の雨にほころひたとへむかた
 もなかりけるこうけい大夫文武百

司こゝかしこよりはせあつまりける

あひたけいけん馳はせ紫陌塵しこくのちりに冠珮はいざ、めいて鎗二

丹墀月たんのつきに堂上堂下だうしやうだうか

ふたゝひさける

花の

ことし

(第五回)

かゝりけるところに呉國よりししや

きたれり越王おとろきてはんれいをもつ

て事のしさいをとひ給ふにししやこた

へていはくわかきみいんをこのみ色をお

もんしたまふこれによつてびじんた

つね給ふ事てんかにあまねししかれ

ともいまたせいしこときのかんしよくを

みすゑつわうくわいけいさんのかこみを

いてしとき一げんのやくそくありはや

くかのせいしを呉の後宮へかしつき

いれたてまつりこういのくらゐにそな

へんとのつかひなり越王これをきゝ

給ひてわれ呉王ふさかちんにくたつて

はちをわすれせきりんをなめてい

のちをたすかりし事まつたく國を

たもち身をさかやかさんとにはあらず

たゝせいしにかいらうのちきりをむす

はんためなり生前に一とわかれてしゝ

てのちさいくわいをこせはんせうの國

をたもちてもなにかせんされはた

とひ呉越のくわいめいやふれて一た

ひわれ呉のためにとりこになると

もせいしをたこくへをくる事はあるへか

らすとそなたまひけるはんれいなみた

をなかし申けるはまことにきみてん

くのおもひをはかるにしんかなしまさる

にあらずといへとももしいませいしをお

しみたまは、呉越のいくさふた、ひやふ
 れてこわうまたつはものをはつすへし
 さるほとならば越の國を呉にあはせ
 らるゝのみにあらずせいしもろともに
 うはるへししやしよくもうは、れなん
 われつら／＼事のていをはかるに呉
 王いんをこのみいろにまよふことはな
 はたしせいし呉の後宮に入給ふほとなら
 は呉わうこれにまよひてまつりこと
 をうしなはん事うたかふところにあら
 す國ついへたみそむかんときにをよん
 てつはものおこし呉をせめらるればか
 つことをたちどころにゑつべしこれ
 しそんはんせいにおよんでふじんれん
 りの御ちきり久しかるへきみちとなる
 へしと一とはなけき一とはいさめて
 りをつくし申ければ越わうことはり
 にをれてせいしを呉國へそをくら

れけるこそまことに

たくひなきわかれ

なり

(第六回)

せいしはまたをしかのつゝつかのま
 もわかれてあるへきものはとおもふ中
 をさけられていまたいとけなきわうせ
 きよにもいひしらせすおもひをきなら
 はぬたひにいてたまへはわかれをした
 ふなみたさへしはしかほとと、まらて
 たもとのかはくひまもなし越わうは
 またこれやかきりのわかれなるらんと
 たえぬおもひにふししつみてそなたの
 そらをはる／＼となかめやり給へはちゝたる
 ぼさんのくもいと、なみたの雨になり
 むなしきゆかにひとりねて夢にもせ

めてあひみはやとまくらをそはたてふ

したまへはそふかひなきおもかけに

せんかたなくなけき給ふもけにことほり

なりかのせいしと申はてんか第一の

びじんなりよそほひなつて一たひ

ゑめはもゝのこびきまかまなこをま

よはしてやうやくいけのうへに花なき

かとうたかふゑんとぢてわつかにみれはちゝの

すかた人のこゝろをとらかしてまちにくも

まに月をうしなふかとあやしまるされは

一たひ宮中にいりてくんわうのそは

にはんへりしより呉王の御こゝろうか

れてよるは夜もすからいんらくをのみたし

なんて世のまつりこともきゝたまはず

ひるはひねもすにゆうゑんをのみ事

として國のあやうきをもかへりみたまは

すきんでんくもをさしはさんて四へん

三百里かあひた山河をまくらのしたに

見おろしてもせいしとゑんせじ夢の

うちにけうをもよほさんためなりきん

ていのみゆきなるにはななき春の日は

しやさいをうつみてくつをにほはしあん

きうに月なきなつの夜は螢火をあつ

めてともし火にかふいんらん日をかさね

てさらにやむときなかりしかはかみす

さみしもすたれともねいしんはおもねつ

ていさめせず呉王ばんしゑひてわす

れたるかことしごししよこれを見

て呉わうをいさめて申けるは君みす

やいんのちうわうたつきにまよひ世

をみたし周しうのゆうわうはぼうじをあ

して國をかたふけられし事をきみ

いませいしをいんしたまふ事ほうに

すきたり國のけいはいとをきにあら

すねかはくはきみこれをやめたまへと

げんかんをおかしていさめ申けれとも

呉王あへてきゝたまはすあるとき又
 ごわうせいしにゑんをせんために
 くんしんをめしてなんでんのはなぞの
 にゑひをすゝめたまひけるところに
 ごししよいくわんをたゝしくしてま
 いたりたりけるかさしもたまをしき
 きんくをちりはめたるようかいをの
 ほるとてそのもすそをたかくかゝけ
 たる事あたかも水をわたるときのご
 とくひとくそのあやしきゆへをとふ
 五ししよこたへて申けるはこのこそ
 たい越王のためにほろほされてく
 さふかくつゆしけき地とならん事と
 をきにあらすわれもしそれまていのち
 あらはすみこしむかしのあとゝてたつね
 みんときさこそ袖よりあまるけいきよく
 の露もしやうくとしてふかゝらんす
 らんとゆくすゑの秋をおもふゆへに

身をならはしてもすそをあくるなり
 とそ申けるちうしんいさめをいるれと
 も呉わうかつてもちひたまはさりし
 かはあまりにいさめかねてよしや身
 をころしあやうきをたすけんとやお
 もひけんこししよ又あるときたゝいまあ
 らたに砥とより出たる青蛇せいしやのけんをもち
 てまいたりぬひて呉わうの御まへに
 とり出しいて申けるはわれこのつるき
 をとく事はしやをしりそけかたきをは
 らはんかためなりつらく國のかたふかんと
 するそのもとひをたつぬれはみなこれ
 せいしより出たりこれにすきたるかたき
 あるへからすねかはくはせいしかくひを
 はねてしやしよくのあやうきをた
 すけんといひて

きばを

かみて

たつたり

けり

(第七回)

ちうけん耳にさかふとき君ひをお
 かさすといふ事なければ呉王大きに
 いかつてごししよをちうせんとすごし
 しよあへてこれをかなしますあらそ
 ひいさめてせつにしするはこれしんか
 ののりなりわれまさに越のつはも
 の、手にかゝりしなんよりはむしろくん
 わうのてにしなん事はうらみの中の
 よろこひなりたゝし君王しんかちう
 かんをいかつてわれにしをたまふ事
 てんすてに君をすつるなり君越王
 のためにほろほされてけいりくのつ
 みにふさん事三年をすこすへからす

ねかはくはわかりやうがんをくしつて呉

の國のとうもんにかけられてそのゝち

くひをはね給へ一さうのまなこいまた

かれさるさきに君こうせんにほろほさ

れてしけいのなんにおよひきたまはん

をみて一せうをこゝろよくせんと申け

れは呉わういよくいかつてすな

はちごししよをちうせられその

りやうかんをくしつて呉のとうもん

のはたほこの

うへにそ

かけられ

ける

下

かゝりしのは君あくをつめともしん
 あへていさめをけんせすたゝくんしん

くちをつくみてまんじんめをふさひて

そ居たりけるかくてはんれいは呉國へわ

たり國のやうをも見きかんためにたゝ一人

あき人のまねをしてみやこちかきあたり

の市にいてゝ人にましはり國のまつり

こと民のしたかふやうきゝたりけるこゝ

にとしころみえしたかふほとなるさふらひ

とおほしき人市にいてゝたちをうるはん

れいこれを見てはや世はみたれたりと思ひ

この人にとひよらんために此たちをあた

ひをいはずかひとりてはんれい申けるは

いかにかたゝのていをみるによし有けに

みえたまひしかいかなれはさふらひの命に

もかへぬつるきをかくばいゝしたまふは

ふしきさよといひけれはかの人こたへていふ

やうさん候はつかしき申事にてはんへ

れともわれつまをもてり一人のちこあり

かれはやうへにおよふゆへちからなくたち

を二人のうへをたすけん

ためなりとそ

申ける

(第一回)

はんれいなみたをなかしてさてはこく

わうのおさめよろしからさるかつたへ

きくごししよといへるけんしんなにと

てまつりことをいさめたまはぬそや

といひけれはさん候呉王ふさはせいし

といふびじんにまよひあけくれしゆ

えんをことゝしたまふごししよこれを

いさめけれはかへつてごししよに死を

たまふなりとそかたりけるはんれい

きゝさてははやこししよはほろひぬる

そやとよろこひかの人にちかつきひそ

かにいひけるはわれ千りやうのこかねを

もつこれを御身のさいしにあたへむ御身のいのちをわれにうり給ひやといへはかの人いふそれこそやすき事なりわれすてによはひかたふきぬさいしたに世にあらはなにかおもひをく事はんへらむといふはんれいなのためによるこひやかて千りやうのこかねをさいしにわたしてかの男をともしひて越の國にかへり呉國のきんしんを二十よにんむほんのかうぶんをかきおくにれんばんにちをそゝきてつくりかのおとこのもゝをたちて中にいれきすをいやしてはんれい申けるはなんち呉國へゆきたいりのあたりにたゝすみようありけなるすかたをせはさためてけいごのぶしあやしめてやかていましめかうもんすへし一たんはあつへからすつよくせめはそのときおち

てごわうにあひてひそかにそうもんすへしとてもゝのうちなるくわいふんを見せよとよくくゝいひをしへて呉國へそつかはしけるかのおとこをしへのことくして呉わうのたいりにゆきかなたこなたとしければてんこくのくわんこれを見ていかさまこれは越の國のけんみなるらんとてやかてとつていましめくひかせをいれてそうもんすいそきかうもんせよとのちよくちやうなりやかてすいくわのせめをあてけるかすこしもおちぬるけしきななをもつよくせめよとて三日三夜せめければかのしふんよきとおもひてくるしけなるこゑをあけて申けるはいまはいのちをたすけ給へありのまゝにそうもんせんといへはやかていましめをゆるしてけりそのときわれしさ

いあるものなれみかとの御めにかゝり
 ひそかに申さんといふさらはとてなん
 てんにひきすへをのくさをさつてゐ
 たり呉王いかなる事そとのたまへは
 かのものいふやう君わかもゝをたちて
 御らんせよといへは呉わうあやしみ給
 ひ御けんをもつてかのものゝもゝをた
 ちてみたまへは一通の書ありひらき
 て御らんすれはきんしん廿余人一とうに
 むほんのれんはんなり呉王あやしく
 おもひてそれよりこゝろゆるされす
 ひそかにかの廿余人のむほん人を
 かなたこなたにてみなくちうし
 たまひけるのこる人々これをきゝ
 ていかなる事やらんとたかひに
 もんこをとちて

ようしん

きひしくして

こゝろを

ゆるす

事

なし

(第二回)

爰にならひのしんの國具にそむ
 きてやしんをさしはさむよしき
 こえければ呉王みつから十万よきの
 せいをそつしてしんの國へおもむき
 給ふしんの國王もとよりおもひまふ
 けたる事なれば國中のせいをか
 りもよほしてきよりんくわくよく
 のちんをはりてまちうけたり呉
 わうもとよりいさめる大しやうな
 れはみつから十まんよきのさきにたつ
 てかけたまふされともしんのいくさ

つよふしてしはしはす、みえさりけり

これによつて一日二日と日かすをへ

てた、かひけつすれともそのせう

れつはなかりけり呉王のたまひけるは

このいくさをのひく、にせはまたしんに

こ、ろさしある國もあるへしせいつきな

はなにとせむるともかいあるました、

きをもさせすせめよやとてみつから

せめつ、みをうちまつさきに立て

か、り給へは十萬よきのつはもの

ゆんでめてにひつそふて馬けふり

たて、せめた、かふもとよりしん

のつはものふせくといへとも小せいな

れはすこしせめたてられたる呉王

かつにのつてせめたまへは一ちんを

うちやふられて大さんのふもとに

ひかへてなをさ、へたり

(第三図)

こ、にいたつてすこしいきをそつき

ゐたるかくて越わうは本國にかへり

いかにもして呉國をほろぼさんとお

ほしめして冬はこほりをにきり夏

は火をつかんでみつからその身をかた

めたまふあるときゑつわうこ、ろみに

きうでんに火をつけ給ふにたみ此

火をけさんとするものなし越わう

御らんしててきにあふてしするもこ

の火のなんにあふてしするもちう

しやうひとしかるへきとのたまへは

たみこれをき、てころもを水にひたし

て六千よにん火にはしりいりて

つるにこの火をきやしけり越王い

まははや呉王をほろほす事やす

かるへしとおほしめしけるところに

呉王しんの國へこえ給ふよしきいて
 はんれいときすてにいたりぬとよろ
 こひてみつから二十万きのつはもの
 をそつして呉國へそをしよせける
 ごわうふさは國中のつはものを引
 くしてしんの國へこえたまへはふせく
 つはもの一人もなしはんれいまつせいし
 をとりかへして越王のみやへかへし入
 たてまつりさてたいりに火をつけ
 てやきはらひけるまたせいその兩國
 も越にこゝろさしをつうせしかは三十
 まんきをいたしてはんれいにちからをあ
 はすごわうこれをきひてまつしん
 の國のたゝかひをさしをきて呉國へ
 ひきかへし越にたゝかひをいとまんと
 すればまへに呉越齊楚せいそのつはものうん
 かのことくかけたり呉王大てきにぜん
 こをつゝまれてのかるへきかたもなかり

ければ死をかるくしたゝかふ事三日三
 夜はんれいあらてをいれかへていきをも
 つかせすせめければ呉のつはもの三万
 余人うたれてわつかに百よきに成に

けり

(第四回)

呉王みつからあひあたる事三十二か
 と夜はんにかこみをとひて六十七きを
 したかへてそさんにとりのほり越王
 にししやをたてゝ君わうむかしくわい
 けいさんにくるしみしとき臣ふさこれを
 たすけたりねかはくは我今より後越の
 下臣となりて君わうのぎよくしを
 いたゝかん君もしくわいけいのをんをわ
 すれすんはしんかけふの死をすくひ
 たまへとことはをいやしうれいを

あつうしかうさんせんことをそこは
 れける越わうこれをきいていにしへ
 のわかおもひにいま人のかなしみさ
 こそとあはれにおもひしりたまひけ
 れは呉わうをころすにしのひすその
 しをたすけんとおもひたまへりはん
 れいこれをきいて越わうの御まへにま
 いりておかして申けるは伐^{きるに}柄^{からそののりす}其規不^{とせから}
 遠^{とせから}くわいけいのいにしへは天越を呉に
 あたへたりしかるを呉わうとる事なく
 してたちまちにこのかいにあへり
 いまかへつててん越に呉をあたへり
 とることなくんはゑつ又かくのことくのかい
 にあふへしくんしんともにはいかん
 をくたひて呉をはかる事二十一年
 てうにしてすてんことかなしまさらん
 や君非をおこなふときんはしたかはさるは
 しんのちうなりといふて呉わうのししや

いまたかへらさるさきにはんれいみつから
 せめつゝみをうつてつはものをすゝめ
 つるに呉わうをいけとりてくんもん
 のまへにひきいたす呉わうすてにめん
 はくせられてごわう東門^{とうもん}をすぎ給ふ
 ときちうしんごししよかいさめに
 よつてくひをはねらるゝ時はたほこ
 のうへにかけたりし一双^{さう}のまなこ三
 年までかれすしてありけるかその
 まなじりあきらかにひらけてあひ
 見てわらへるけしきなりければ呉王
 これにおもてをあはする事をさす
 かはつかしくやおもはれけん袖をかほ
 にをしあてゝかうへをうなたれてすき
 たまふすまんのつはものこれをみ
 てなみたを

なかさぬは

なかり

けり

(第五図)

すなはち呉わうをてんこくのくわんにくたされくわいけいさんのふもとにてつゐに御くひをはねたてまつるこれより越王呉王をとるのみならずしんそせいしんをたいらけてはしやのめいわうとなりしかはそのこうをしやうしてはんれいにをんをほうせんため大くはんをあたへ大國をゆつらんとのたまふはんれいかつてそのくはんろくをうけす大めいのしたにはひさしくおるへからすこうなり名とけて身しりそくはてんのみちなりとしてつゐにせいめいをかへ陶朱公とうしゆこうとよはれて五湖ごこといふところに身をかくし

世をのかれてそゐたりけるろくわのきしにつりをしてこうぢんのほかにあそんでつゐにはくとうのおきなとなれりまことにみちにいたりたる人はたれもかやうにありたき事ともなりさてそれより越わうこうせんはせいしとちきりをむすひしゆんせうみしかきをくるしみあさまつりこともたえくなれはいまくらるにありてもゑきなしとて太子わうせきよに世をゆつりわか身はあらためてんをつくりいよく

ゑいくわにさかへ

給ひけり

(第六図)